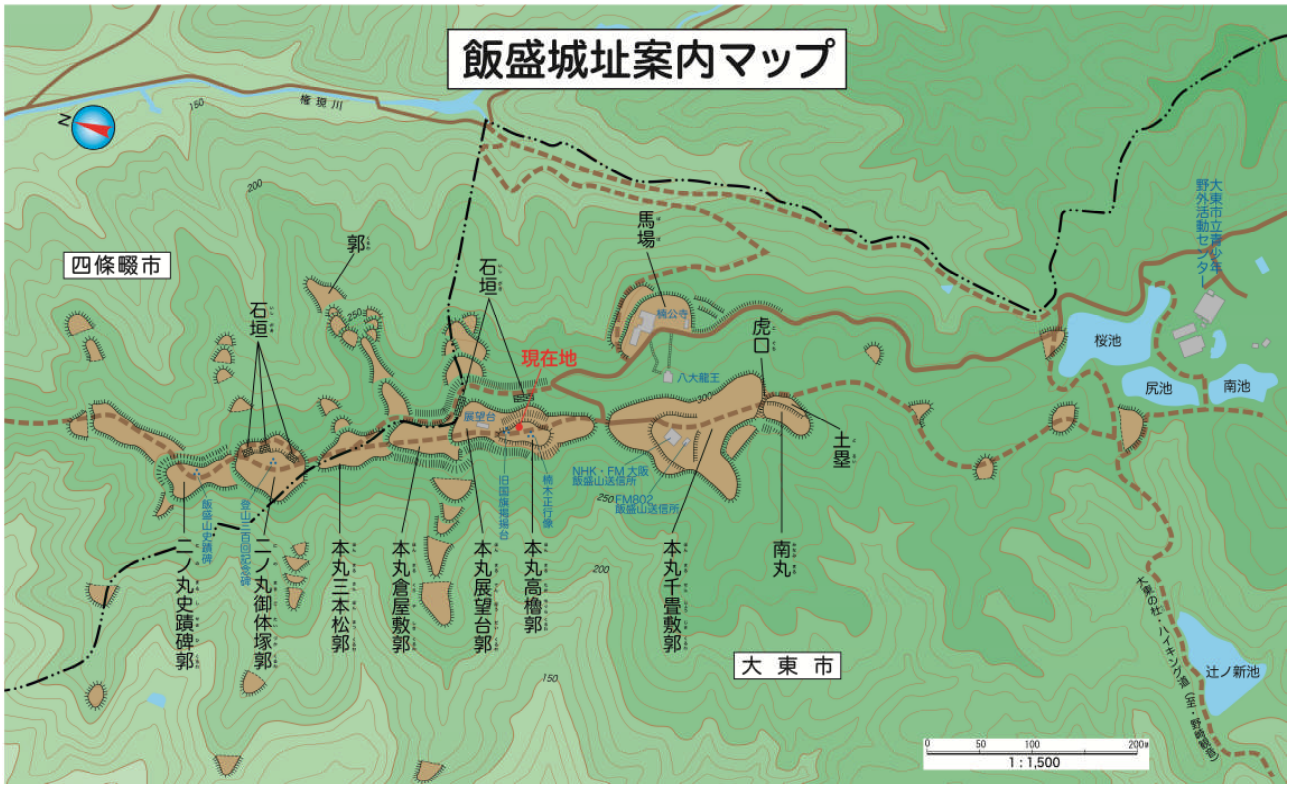
飯　盛　城

飯盛城は生駒山地北部にそびえる標高 314mの飯盛山に築かれた中世の山城です。
飯盛山は東に深い谷を有し、北と西が非常に険しいことから、眺望に優れ、河内平野や遠くは京都まで一望できます。
また、西側山麓には河内平野を南北に東高野街道が走り、東西には奈良へ抜ける中垣内超え（古堤街道）の街道が走り、交通の要衝として、軍事的な要所とされてきました。



飯盛城の起源は定かではありませんが、南北朝時代には城が築かれていたと推定され、本格的に整ったのは畠山の家臣、木沢長政が居城とした享禄 4 年（1531）の頃とされています。永禄２年（1559）に河内進出の機会を伺っていた三好長慶が、長政を破り芥川山城から飯盛城に移り、ここを拠点として畿内を支配します。しかし、その隆盛は短く永禄７年（1564）に長慶は死去し、天正 4 年（1576）に織田信長に攻められて落城し、以後は以後城となりました。

飯盛城は南北 650m、東西 400mの中世山城としては最大級で、飯盛山の尾根伝いに大小 70 近い郭や砦の跡があります。また、中世山城の特徴として天主はありませんが、主に安土城以降といわれる石垣が築かれているのが特徴です。

二ノ丸史跡碑郭

「飯盛山史跡の碑」のある郭で、南隣の御体塚郭とは尾根伝いに急坂で結ばれています。平成２４年１月の測量時に飯盛城の最も北側の郭と推測されています。この碑は１９２３年（大正１２年）四条畷中学校校友会によって建てられたものです。

四條畷方面から見た飯盛山

二ノ丸史跡碑郭から京都方面への眺望

二ノ丸御体塚郭

史跡碑郭から南へ７０ｍにある南北３０ｍ×東西２７ｍ、１５ｍの梯形の削兵地であり、東面には石垣が見られ、南北両端は深い堀切で守られています。三好長慶の死後、その死を２年間にわたり公表しなかったのですが、その仮埋葬地だといわれています。

本丸三本松郭

ニノ丸郭と深い堀切で区切られ、郭の北端からは、天王山や遠く京都方面まで見渡すことができます。

本丸倉屋敷郭

「穴口」ともいわれ、長期籠城にも耐えることができるよう武器や兵糧などの倉庫があったといわれている。

二ノ丸史跡碑郭から大阪方面への眺望

本丸展望台郭

最上段の高櫓郭から５ｍ程の下段の２０ｍ×１７ｍの平地、展望台跡があります。太平洋戦争中にはＢ29 の来週に備えた防空監視哨でした。老朽化で上には登れません。

本丸高櫓郭

飯盛山の山頂で、国旗掲揚台、正行銅像が存在する２５ｍ×１５ｍの削平地です。

楠木正行像

昭和 12 年 6 月、当時の四條畷村長八代氏が発起人となり小楠公会によって、元東京美術学校教授黒岩淡哉氏によって製作されました。

18 年に戦時供出されましたが、47 年に田伐兼松氏によって再建されました。銅像は四条縄手合戦前に吉野の如意輪堂の壁に辞世の句を書き終えた姿だといわれています。像は北方を向いており、湊川の戦いを前に楠木親子の今生の別れとなった西国街道桜井駅を向いているといわれています。

国旗掲揚台（俗称）

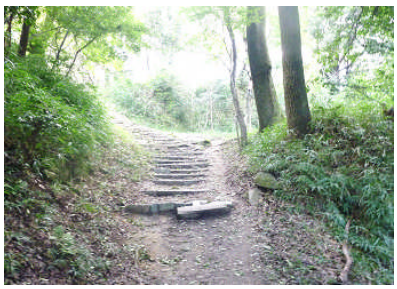
石碑と案内板

石垣（高櫓郭東側）

安土城以前の中世山城は、天守、石垣がつくられないという定説の中で、飯盛城には多くの石垣が残されており、石垣が飯盛城の特徴のひとつとなっています。この写真は、高櫓郭の東側にある最も良く残っている石垣です。

本丸千畳式郭

本丸高櫓郭の南、深い堀切を超えたＦＭ８０２の送信所の南側下段は、広い平坦地が少ない飯盛山にあっては比較的広い平坦地があります。ここが、千畳敷郭とよばれ、少し大きな建物があり、最大の兵力を置き、南からの防御に備えたのではないかと考えられています。



虎口

飯盛城の南の出入口にあたる道幅の狭い場所で、ここに城門があったと考えられています。

馬場

本丸東側の山腹にあり、場内では最も広い。ここに厩舎があり、物資の集積場所になっていたものと推測されます。現在は楠公寺の敷地となっています。

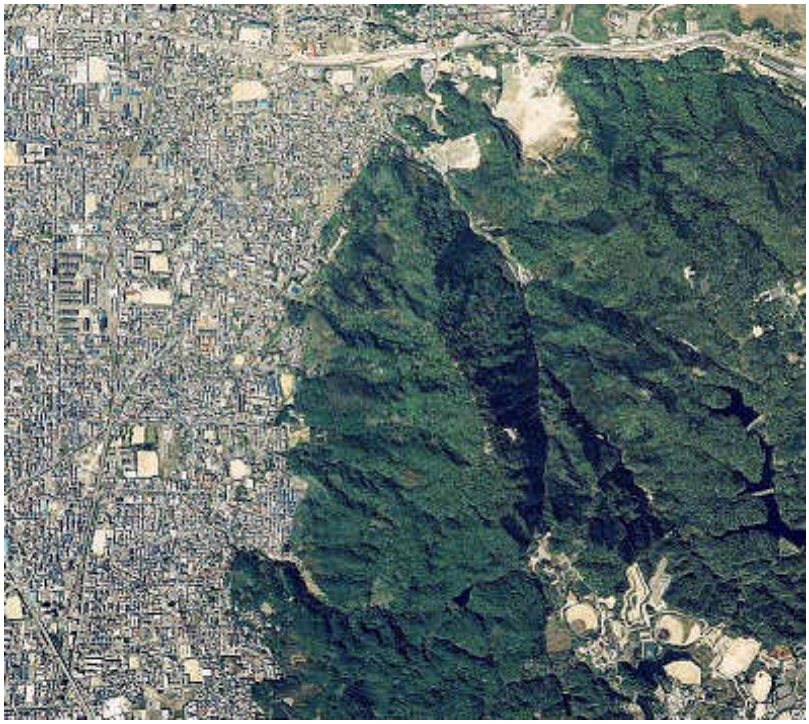
土橋

堀切を横断する通路として設けられる土の堤のことをいいます。写真は虎口南側の土橋です。

千畳敷出郭

千畳敷から南方への通路に沿って西側に突き出した郭です。南方から敵に攻められたときには、上方から虎口に向かう隊列の横に攻撃ができるように防御機能があったと考えられています。

飯盛城上空



堀切

山城特有の防御手段で、尾根や峰を掘削して堀を作り、郭を区画したり分断しているものです。飯盛城址でも郭の分断で用いられています。写真は二の丸堀切

三好長慶と飯盛城

大東市東部の生駒山系の北端部に位置する大規模な山城「飯盛城」は、戦国の梟雄といわれた三好長慶の全盛期を支えた拠点でした。

飯盛城とその周辺を舞台とした、三好長慶の活躍から衰退までをご紹介します。

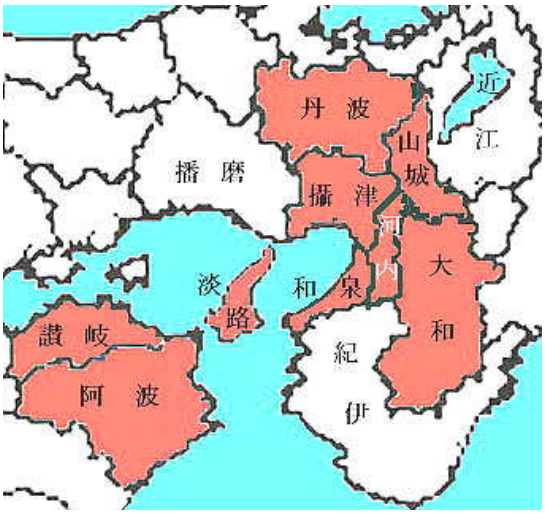
～長慶の畿内進出～

享禄４年（1531）、長慶の父、元長が現在の大東市域西部を含む北野神社領河内国八ヶ所の代官職に就きます。大坂と京都の中継地点である当地の支配が、三好氏の畿内支配の第一歩となりました。

その直後、河内守護畠山義宣と、飯盛城主の守護代木沢長政の争いが勃発し、細川氏と一向宗の対立まで発展しましたが、父を亡くした長慶は、その後、細川氏と一向宗の和議を仲介しました。

その後、父の仇敵である木沢長政を討ち、細川晴元と将軍足利義輝を京から追い出し、芥川山城（高槻市）を居城とします。

永禄３年（１５６０）には、長慶の弟、十河一存を倒した飯盛城主安見直政を破り飯盛城に入り、ついに長慶は畿内を制覇し、三好氏はその全盛期を迎えました。



長慶の最盛期の勢力範囲

～飯盛城での長慶～

長慶は連歌、茶の湯にもすぐれた教養をもつ文化人としても知られ、飯盛城ではたびたび連歌会が行われています。また、キリスト教にも寛大で、自身は改宗しませんでしたが、飯盛城で家臣７３名が洗礼を受けていいます。その中の一人、三箇城主三箇頼照（サンチョ）は、河内キリシタンの中心的な人物の一人でした。

～三好氏の滅亡～

永禄４年、畠山高政と近江の六角義賢に攻められ、長慶は勝利するも、この激戦で弟の三好義賢を失います。その後、嗣子の義興が急死し、甥の義継を養子に迎えます。相次ぐ親族や家臣の死により心身衰弱となった長慶は、永禄７年（1564）に弟の安宅冬康を殺害した後、飯盛城にて病により世を去ります。没後２年間はその死が伏せられ、真観寺（八尾市）に葬られました。御躰塚は、長慶の遺体の仮埋葬地であったとされています。

長慶死後、三好氏は上洛した織田信長に降り、義継は第 15 代将軍足利義昭を匿ったとして信長に攻められ、若江城にて自刃し、三好嫡流はここに滅亡しました。信長は天正３年（1575）、高屋城（羽曳野市）を降伏させ、河内の平定を完了させました。